

試験に関する私見

北 垣 宗 治

1

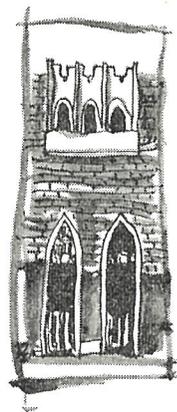
私が旧制の中学に入ったのは一九四二年のことで、日本が太平洋戦争に突入した翌年であった。その一年生のときの日本史の試験のことを今でもよく覚えていいる。「皇大神宮について知るところを述べよ」という大きな問題が一つだけ出た。私は中学生らしい頑張りでできごしり答案を書き上げた。教師はどう考えたのか、それに百点をつけて返して呉れた。地理ではなくて、歴史の試験であるから、天照大神（当時の中学校ではまじめに日本神話の神々のことが教えられていた）と皇

室の関係、神宮の成立と歴史を知っている限り吐き出したものらしい。私がそのことを今でも思い出すのは、百点を取ったからというよりもむしろ、その問題が典型的な「一次元的問題」だったからである。

一次元的な試験問題、と私が呼ぶのは、「何何について知るところを述べよ」という形式で、学生の知識をためす問題である。小学校から大学まで、いな大学院まで、われわれは実に何百回という試験を受けるわけであるが、そのうちで、こうした単純な一次元の問題に何回となくお目にかかったのである。学科の中で歴史や地理はよく「暗記物」と呼ば

れるが、それは一つには、私のいう一次元的な問題設定がなされ易いためである。

次に二次元的試験問題について考えてみたい。それは「何々を論ぜよ」という表現を取るのが特長である。これに「何々の観点から何々を論ぜよ」とあればなおさらよろしい。すなわち知識を吐き出すだけでは不十分なのであって、与えられた問題に、与えられた角度からアプローチしていかねばならない。しかも、その場合には自分の意見もはっきりさせておく必要がある。大学ではこうした二次元的試験問題が尚ばれるのは当然のことである。一次元の問題が知識の吐き出しにとどま



るのにくらべて、この場合はしばしばアイデアの創造が要求されるからである。そのため、自己のとるべき主体的な立場も暗々裡に要求される。頭脳のエネルギーは一次元の問題とはくらべものにならぬくらい消耗するにちがいない。

2

第三は、いうまでもなく三次元の問題である。それは一つの事柄に関して対立する二つ以上の見解を示し、そのどちらかを選ばせて理由を問うか、更にはそれらの見解を止揚して、より妥当な新しい立場を創造させるような問題である。三次元の問題の解決には弁証法的なアプローチが要求されるわけである。

こういう問題は教師の方でなかなか準備ににくい。第一、めんどうくさいし、複製に時間がかかって仕方がない。しかし、私はこれが一次元的問題、二次元的問題にもまして教育的であり、しかも大学にふさわしいものと考えてるのである。

皮相のそしりを恐れずに、実例を出してみたい。経済学の場合、よくマルクス主義経済学の立場と、それに対立する近代経済学の立

場から、はげしい論戦が展開されると聞く。

(一方の立場は他方の立場を学問的立場と認めない、というほどの対立さえあると聞く。) 私はそれを利用して、一つの経済事象をとりあげ、マル経の立場からの分析と、近経の立場からの分析を示し、学生にどちらの分析がより妥当であるか、またどちらも妥当でないとするれば、あなたはどのようにアプローチし、どのように分析するか、といった問題をぶつけるのである。私はこうした問題こそが本当の意味で物の考え方を養わせることにならぬのではないかと思う。

私は自分の専門である英文学の分野でこの三次元の問題の実例を出してみたい。たとえば有名なスウィフトの『ガリヴァー旅行記』の第四部は、フイーヌムと呼ばれる完全に理性的な馬の国へガリヴァーが流れついて、そこで様々な事を見聞する物語である。ところで、この第四部に関して、作者スウィフトの創作上の意図を問題にする場合、二つの対立する意見がうかび上ってくる。第一は、スウィフトはあの部分を、人間もまたフイーヌムのように完全な理性に到達し、理性によってのみ支配される理想的な社会を築くべきであ

る、という意図をもって書いたとする説。第二は、当時(十八世紀のはじめ頃)さかんに理性の重要さが強調されていたが、行きすぎた理性主義は、まさにフイーヌムの社会に見られるような、非人間的な、退屈な社会に導くものである、という理性主義の行きすぎに対する皮肉であるという説。さて、この両方の説を紹介し『ガリヴァー旅行記』を既に読んでいる学生に、どちらの説がより妥当であるかを問い、その理由を記させ、できれば両方の説から第三の説を創造させるのである。

問題としてはこの三次元の問題は一、二次元の問題にくらべてむずかしいにきまつている。しかし、問題のレベルとしては、研究者が自分自身の問題として取組んでいるもの意外にも近付くのである。時には学生は苦しませるに、驚くべきアイデアを打ち出すことがある。ふだんは無味乾燥な答案調べであるが、そうした創造的な答案に出くわす時の喜びは忘れられない。実はこの試験問題が契機となって、スウィフトについて卒業論文を書き、大学院に進んだ学生がいたのである。

3

三次元的な問題はまた日本でははやっていないように思われる。その証拠に、私がせつかく苦心して作った三次元的問題に対し、三割くらいの学生は一次元的問題のつもりで答案を書くからである。私は『ガリヴァー旅行記』について、方向付けの非常にはっきりした問題を出した筈である。しかるに、学生の何人かは、スウィフトの伝記をながながと書いたり、当時の理性偏重の状況を長々と論じたりする。スウィフトと『ガリヴァー旅行記』について知っていることを何でも書いてやろう、という意気込みを見せるのである。私はそのような答案を読みながらうんざりしてしまう。

しかし、それには或る程度のものである。或るまじめな、しかし実験的な学生がこんな話をきかせてくれた。某学部のある先生は、どうも試験の答案を讀まずに採点するらしい、というのである。そこでその学生はまんまじめにこんな実験を試してみた。その授業には年間を通してほとんど出席しなかつた。学年末試験でははじめと終りだけ、問題の趣旨につつまが合うようにしておき、自身はすっかり問題とは無関係なことを書いてみた。ところが堂々と八十点台で合格してい

たのである。私は今あえて、彼がまじめな実験をした、と言いたい。なぜならこの場合は教師がふまじめを働いたのであるから。その学生は私にその話を得意気にしたのではない。そういう教師がいるから、時にはまじめに勉強する気がしなくなる、といつて嘆いたのである。私は現代の学生気質の一部には、たしかにそのような一面があると思う。白紙で出す学生はいさぎよいのである。何とかごちゃごちゃ書きなぐつて、あわよくば多人数教育の弱点につけこんでみようという学生。私はそういう学生の答案を前にして溜息をつくばかりである。

私は一九五七年に、さいわいにも新島先生の母校であるアーモスト大学で半年間勉強する機会をえた。アメリカの大学がよく学生をしぼることは有名すぎる事実である。私は僅かに二科目しかとらなかつたが、それでも何回かペーパーを書かされ、試験も受けてきた。しかもその試験とペーパーの問題たるや、その多くが私のいう三次元的問題であつて、一次元的な問題には一度も出くわさなかつた。むしろアーモストでは、(そしてアメリカの優秀な大学でも)三次元的問題ない

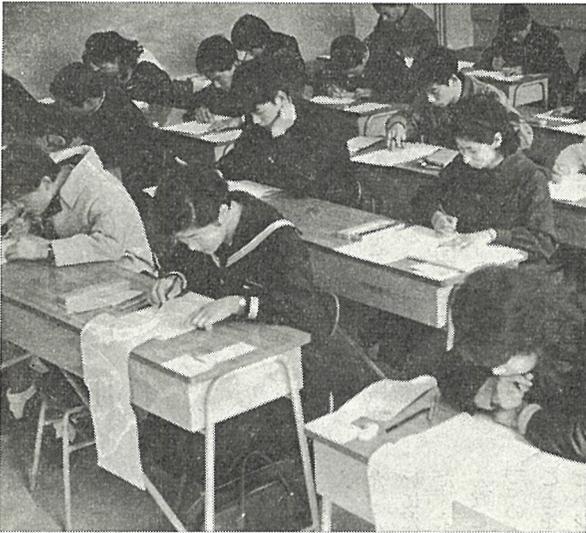
し二次元的問題のみが普通であつて、学生自身の主体的な反応と、アイディアの弁証法的な創造を要求する点で三次元的問題が主流をなしているといつてよいと思つた。私の取らなかつた哲学や宗教学や、経済学、政治学、歴史等においてもこのことは同じであることも見てきた。リベラル・アーツ教育の特色が、こうした試験問題にはつきりとあらわれているように思つた。

4

私の考えでは、大学においてはさききのべた一次元的試験問題は今後だんだん分量をへらしていくべきだと思つた。大学における定期試験の時間が九十分から七十分一律に「一切下げ」られた(もつとも教師が希望すれば九十分与えられはするが)事情の一部分には、この一次元的な試験問題が出されすぎたということがあつた、と私は見ている。三次元的な問題には少くとも九十分を与えなければよい答案が書ける筈がないからである。

この一次元的問題の優勢の今一つの理由は入学試験にもある。私は毎年日本史、世界史等の問題を見て、その画一化された、暗記物

中心の出題方法に慄然とする。あそこでは無限に細かい事実に関する知識のみが要求されている。そこでは、展開していく歴史のパノラマを概観する、といった余地は全然ない。受験のための歴史の勉強は、若い人たちの歴史観の形成をどれほど疎外しているか、はか



(入試風景)

りしれないものがあるように思う。

一次元的な問題の背後には、実はごく単純な教育哲学がひそんでいる。それは「知識を与えることが教育である」という思想である。大学にあつては、一般教育科目、専門科目の別を問わず、各科目の内容をなすものが知識

であるといつてよい。教科書はその知識を秩序付けて表現したものである。大学では毎日のように教室を通して一定の分量の知識が教授から学生へと伝えられていく。しばしば見られる現象は教授のノートから学生のノートへと、知識がうつされることである。この形式を皮肉な観察者は大学教師が知識を「切り売り」しているのだ、と言う。学生は一夜漬けて覚えこんだことを、一次元的試験問題にえたりかしこしとばかりに、まるで嘔吐する病人のように答案用紙に吐き出すのである。

しかしながら、これがいったい大学教育の名に値するのであるうか。大学では確かに知識が与えられなくてはならない。文学に関する知

識、法律や経済に関する知識が与えられなくてはならない。しかし知識を獲得した人が教育を受けた人である、と単純に割り切つてよいだろうか。教育と学問知識の間には、いったいどんな関係があるのだろうか。私が関心を持つのはまさにこの点である。私はこう考へる。知識は教育の媒介である。真の教育は知識を追求する過程において得られる。それは真理を追求する過程を通して、より豊かな視野を与える。教育は単なる知識から、知慧を創造させる。今日の大学教育の重要な問題点は、知識を授けることが教育であるという、漠然とした、いわば一次元的教育哲学に安住していることである。教師が学問に対し、知識に対し、真理に対してきびしい態度をとること、さらには教師がさまざまな思想と格闘するように、学生にも思想と格闘し、弁証法的な突破口を見出す機会を作つてやること、これが本当の教育であると考へる。私は試験万能主義者ではないが、それでもなお試験という制度は、きびしく、かつ効果的に運用すれば、驚くべき教育効果を発揮するものであると信じている。そういう意味においてのみ、私は試験の礼讃者なのである。

(文学部助教・英米小説)

忘却と

一つの思い出

林 要



「ご自由なテーマで」という依頼状。そのまま放つてあったのを、ふとみると、きょうが切り。三月一日である。久しぶりの在宅で、好日。シャベルをさげて庭に出かけたのをやめて、筆をとる。

同志社はなつかしい。が、罪な処でもある。教師にだけはならぬと決意していたわたしを教師にしたのが同志社だった。乞食と教師は一度なったらおしまいだ。この年になって、いまだに不勉強な老骨を教壇にさらしている。やたらに年はとるくせに思い出や昔ばなしは、すきでない。きらいというのでもないが、右から左へ忘れてしまつて、話のタネにもならないのである。

あけたから去年になるが、ふと駅で買った新聞のかたすみで、住谷総長の名が目についた。「その人を知らず」とかいう見出しだった。よんでいくと、わたしがしきりに引きあいだにだされている。まったく記憶にないことだ。よみかえしているうちに、あるいは、そんなこともあつたかな、と思うようになった。「その人」というのは、たいへん奇特なよいことをした人らしい。「その人」はオレだったかな、という気もしてきた。そんなこともあつたかな。どうもハッキリしない。また読みかえてみた。毎月かなりの額のお金を住谷君にわたしながら、その住谷君がお金を出す所をきいても、わたしは「そんなことに気がすることない」と、かるく笑つて「その人」の名をおしえなかつたらしいのである。だか

ら、「その人を知らず」と、いまも同君はいうのだが、「あれは教え子の某君ではなかつたらうか」と住谷君は推測し、三十余年にわたつて心にきめた感謝の意を腰だめで「その人」らしい人に表明しているのである。

某君?!— そうだつたかな。そうかもしれない。たぶん、そうだろう。いや、そうにちがいない。なるほど、たしかに、そうだったようだ。「わたしからとはいわないで、わたしにしてください」とたのまれて、シンパ事件で同志社をやめた住谷君への救援資金を、わたしが毎月とりつがされたような気がしてきた。気がしてきたは、たよらないが、住谷君のヒントでよみがえつた私のこの記憶には、九九%九九まで、まちがいないような気がする。

住谷総長はたいへん記憶のよい人らしい。申ちゃんといつたかな、住谷君の弟さんが最近なくなつたとき、その死亡通知の一隅に、「弟が同志社卒業まぎわに思想事件で停学処分をうけて卒業できそうになくなり、たいへんこまっていたところを、ハヤンさん(とき)の学部長だったのかな)の計らいで無事受験して卒業でき、うんぬん」と、謝意をこめた

思い出が書きそえてあった。まったく身におぼえないことである。とくべつの計らいなごした覚えはないし、だいいち申ちゃんに、そんな事件があったかどうかとも記憶がない。

2

「おぼえないのと忘れるのは、いくら私の特技らしい。昨秋、わたしは、なにかのはずみで社会・文化活動家使節団の団長というイカめしい資格で朝鮮や中国を一月半ほど旅行した。ずばぬけて年は多かつたが、いちばん元気だったと、わかい団員諸君がわたしのカラ元気をからかいながら、いうことには、——「団長さんの健康の秘訣は、なんでも忘れることにあるんだ」と、なるほど、ホテルに入れば自分のルーム・ナンバーを忘れるし、団長専属の毎日の自動車をいつも取りちがえるし、専属運転手さんの顔は二週間たつても、まだ見わけがつかなかったし、見学先きの責任者と別れの握手をするつもりで、わたしと同乗していった案内人の手をかたく握りしめたりした。それをわたしの健康法だど団員一致の決定をしてくれたのは、最後の団会議のときだった。

そのわたしにも、住谷総長について覚えてゐることが、すくなくとも一つはある。しかも、それは、わたしの同志社在職足かけ十五年中の唯一の手柄ばなしでもあるのだ。このわたしの手柄がなかつたら、いま住谷先生は泰然として、総長室におさまっている代わりに、「故陸軍歩兵伍長住谷悦治」と楷書で書かれた一個の朽ちた墓標の下に寂然として声なく横たわり、「憲法改悪阻止」を天下に呼びかけたりはしないですんだかもしれなかつた。

ひととも知るように、日本は一九三一年（昭和六年八月十八日）はやくも公然と満州侵略に着手し、あくる三二年（昭和七年一月二十八日）には上海攻撃にのりだし、そして三七年（昭和十二年七月七日）には、あのいわゆる日支事變つまり本格的な中国侵略の暴挙に立ちあがった。その三二年の上海事件のときだった。わが住谷教授にも動員令がきた。ときの法学部長が、わたしだった。当時どの大学でも文部省からおしつけられた現役の配属将校が軍事教練をやっていた。同志社にも大佐をかしらに、少佐や大尉がいた。その配属将校たちの居場所を教授控室から分離して事務室の一角へうつしたのが、わたしの学部長

としての最初の仕事だった。

そのわたしが住谷君に召集令のきたとき、さつそく大佐のところへ飛んでいったなんとかならないかと相談をもちかけた。れいによつてその大佐の名前はわすれてしまつたが。

こう書くと、勇氣ある男のように私がみえるかもしれない。へたをすれば、そのまま憲兵隊へつくだされかねない当時の情勢だったから。しかし、わたしはその大佐に、なんとということなしに、ある親しきをもつていた。かれは配属将校としてはめずらしく胸に天保銭をつけていたが、大きな丸坊主あたりに軍帽をすこしアマダにかぶつていた。悠揚として禅坊主めいてもいた。学部長ともなれば、年に一度の、あの、なんといつたかな、査閲とか検閲とかいうものに立ちあわねばならなかつた。そういう日には師団本部からイカメしい少将が司令官として堂々校庭にのりこんできて、軍事教練の実態を査閲する。そして高ビシヤに講評し訓示する。配属将校たちも一生けんめいだ。司令官のまえで、つくりつけのように角ばつた動作で指揮刀をふるう。ところで、右の天保銭どの、ひごろの教練は人まかせの様子だが、当日にかぎり凜とし

てみずから号令をかける。そして全学生隊の行進がおわるや、間髪を入れず、「本日の教練、たいへん、よろしいノ」と、大声で叱咤するかのように一言いい放つ。それも「おおむね、よろしい」などのキマリ文句ではない。「たいへん、よろしいノ」と、司令官にききかけて、断乎判定をくだすのだから、あとからやおら講評台にのぼった司令官も、毒気をぬかれて文句のいいようがないのだった。

教授控室と研究室（図書館）とは、相国寺南門につきあたる道をへだてて向いあつていた。この道を横切るとき、この天保銭大佐がすれちがいかけたわたしのほうへ近づいてきたので、わたしは立ちどまった。すると、「ハヤシさん——といったか、センセイといったか忘れたが——、あのう、そら、このごろよくいわれる、インフレーションというのは、あれはどういうことですか？」と、アマミダの軍帽氏はきくのである。

四十たらずの反戦的な若造のわたしに、人どおりのまんなかで、なんの屈托もなく質問するこつした老大佐に、わたしは人間の好感をもっていた。ふつうに話したことは、いちどもなかつたが。

そこで、住谷教授のことで、わたしは、なんのためらいもなく単刀直入、大佐の室にとびこんだ。勇気があつたからでもなんでもない。「そう、スマヤさんというと、どなたでしたかな。ああ、あの方ですか。そうですね。この連隊ですか。宇都宮。そうですね。あそこの連隊長はいまだれでしたかな。あいつは、せんだつてかわつたし。いや、しらべれば、すぐわかります。そうですね。わたしも一本身紙をかきますが、学校から、この人がいないと卒業期をひかえて学校がこまる。この人は学校にいまなくてはならない人間だ、というような陳情書を出しなさい。」

わたしはうれしかった。ひとハダぬいでくれるからというよりも、スマヤさんを、しっかりと確認していなかったその様子が、むしろ、わたしはうれしかった。スマヤ先生にしろ、わたしにしろ、軍人さんに好意で覚えてもらえるはずはなからうが、目のかたきとしてはトクと記憶されていて然るべきような気がしていたからである。

わたしはさつそく総長の名において長文のテイネイな陳情書を毛筆でたためた。たとえ鬼連隊長だつても、説き伏せてみせる自信

があつた。まずそれを大佐にみせた。ところが、みなまで読まず、「もつ」と簡単に書くんですな。この人がいないと卒業式もできないとか。理由は一つだけ、かんたんがいいです。兵隊は単純で、くわしくはみませんから。」とのことだつた。

わたしは書きななおした。

やがて、住谷教授は全学のわきかえる歓呼の声におくられて、京都駅をたつた。

いっぽんに当時、応召者の欲送はものすごくつた。熱狂した見送り人たちのザツトウで七十何人いちどに押しつぶされて死んだことのある同じホームの群衆に、バンザイの声をあげせられながら、住谷教授は「勇躍」壮途についた。

が、数日後には住谷先生の姿が学校にあらわれた。「キサマ、痔がわるいじゃないか。この非常時にバカヤローノ」とかなんとかわれて、スマヤ先生は、ご奉公もできず申しわけないような顔をして、「即日帰郷」したのだった。

あの大佐、そのご、まもなく脳溢血でなくなつた。ひとりぐらしというのだったかしら。ともかく、わたしは玄関口まで、おくやみに

いった。

3

そのあとたしか、一九三三年、昭和八年に住谷君はシンパ事件の関連で同志社をやめ、一九三六年、昭和十一年の二・二六事件のあと、わたしもやめることになった。千円ほどの退職金をもらった。そのまえから湯浅総長にわたしの進退はまかせてあったが、五月七日、もうこれ以上は守れないからといわれて正式に辞表を出したが、四月もすぎ五月の声をきいてから、あらためて辞表をもとめられたのは、せめて一と月分の給料でも保障してやろうとの総長の好意によるらしかつた。退職金をうけとりに行ったときも、総長はべつに五百円を出し、本でも買え、これには受取りはいらぬと、つけたした。わたしが、「そんな受取りのいらぬ金はもらえぬ」というと、総長は、「なにもべつに意味のある金じゃない、退職金もすくないことだし、」と、おし問答のすえ、「では、いちおう預かりましょう」と、礼もいわずに受けとつたが、けつきよく本は買わずに生活費につかい、やがて一家をあけて失業のまま戦事中の東京へ落ちの

びた。

やめた年の四月の新年度から、わたしは妙なはめで経済史の講座をもちじめて担任することになっていった。わたしにその講義ができるぐらいなら、ノラ猫にだつて義太夫がうなれよう。仕方がないから、経済のはじまりは人間のはじまりからだとの考えから、わたしはサルがどうして人間になつたか、そして経済はどうして始まり、どのように発展するかというようなことから、講義をはじめるともりにした。

学校をやめることにきまつた五月七日も、ちょうど、この講義の日だつた。

「この講義で、わたしのサルはまだ人間にならないが、いま学内の騒然たる物情は、もはや理論の問題ではなくなつてきた。理論のたにかいなら、あえて辞さないが、サルまわしのドロ仕合いに精魂をかたむけるわけにはいかないで、これで諸君とおわかれます。」てなことを、そのとき、わたしはいった。

じつさい軍帽をかぶつたおサルさんが、そのころ、たくさん同志社でもハイカイしていた。ボス猿の手下に落北青年同盟というような平民サルの群も景気よくはねまわつた。一

夜のうちに大学の講室の一隅に神ダナが、かそれらの手でつくられたりもした。

わたしのサヨナラ講義のあるとき、運動場では軍事教練をうけるクラスがあつた。わたしのやめることが、その日の朝の新聞でわかつたので、教練のクラスの学生たちも、教練をすっぱかして、わたしの最後の講座になだれこんだ。気の毒に、その学生たちは、あとで軍事教官から、ひどいめにあつたそうである。

わたしの驚くべき経済史の講義は、さいわいサルが人間にもならぬままに消えたが、そのとき用意されかけたものが、のちに『猿と人間と経済』という本になり、さらに加筆されて『人間社会——その発生と発展の理論』となり、とうとう恥を世にさらすことになつてしまつた。

これは同志社とのわたしの、なつかしいゆかりの落とし子であるが、落とし子はずいぶん育たず、もしあのとき私が同志社をやめなかつたとしても、そのあと、つづきの講義のごまかしようがなくて、わたしはやっぱり辞表でもだすはかなくなつたらう。

(校友・愛知大学教授)

市長の苦勞

吉 田 法 晴

人生の方向

私は運命論者ではない。むしろ自分の運命は自分で切開いて行くべきものと思い、その行動してきた。メーテルリンクの「青い鳥」に現われている、叡知の輝くところ、運命の黒い影は小さくなるという教えを思い浮べつつ、自分の最善を尽してきた。しかし過去五十数年の間に、自分の意思でなしに、自分の意思以上のものによって人生の方向が決めら

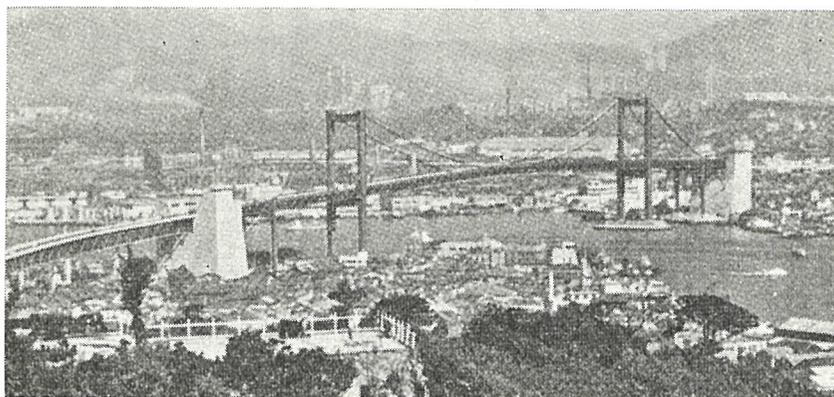
れた機会が大きく二つあった。

一度は同志社を卒業して法学部の研究室に事務助手で残るか（私自身は残りたいと思つた）、郷里の近くの炭鉱に行くべきかと迷っていたところ、恩師森口繁治先生と当時の同志社総長湯浅八郎先生のおすすめによって郷里に近い今の北九州市のすぐ隣の日本炭鉱に入社した時。二度目は、今度の参議院議員三年の任期を残して党の命令、要請ということと、北九州市最初の市長候補に立候補した時

である。

今から二年前、昭和三十七年十一月、左眼の網膜剝離の手術を受けて退院直後、自宅で療養中、そして岳父の元八幡製鉄宿労松木又二郎が脳溢血で倒れて意識不明となり、近親の多数が枕頭に集っていたときである。「私以外に社会党の北九州市長候補はない」として社会党、福岡県総評、参議院の大先輩松本治一郎氏はじめ党の国会議員全員、私の国会議員時代以来の責任者吉村義雄県議その他地





若戸大橋 遠景

方議員、党員、旧知をあげての強い要請、膝

詰談判であった。しまいには「市長候補となるか、もしそうでなければ次の参議院議員選挙は引受けかねる」という脅し文句まで飛出す始末。「そこまで言われるならば」と引受けた時には左の眼の映像はまだ正常に回復せず、身体に自信はなく、悔いがない闘いが出来そうにもなかった。しかし「肉体的生命も政治的生命も賭けて」と、ほんとうにそう思って立候補の決意をした。参議院議員としては比較的安定した地盤も歴史も投げすて、断崖の突端に立つ必死の思いで前進する気持だった。その時ちらっと「貴方の一生は波瀾万丈です」と青年時代に私の指紋を取って、その十指中九指まで渦紋でなく流れているのを見ながら話したことがある警官のことを思い出していた。

この困難な市長選挙の最中、田畑忍先生が総長の代りに来て激励して下さった。選挙後私が北九州市長に就任して間もなく、今度は大塚総長が旧五市の校友会、同窓会の支部が統一して北九州支部となったときその結成式に出席して下さるとともに、私の市長就任を祝って下さった。いずれも自分の意思以上の

ものがあつたように思われる。

北九州の苦悩

北九州市というのは旧門司、小倉、八幡、戸畑、若松の五都市が合併して一昨年生まれれた。一〇六万の人口を有する、全国で七番目の大都市である。

北九州市は日本一の八幡製鉄をはじめ化学セメント等の重化学工業を中心にした産業の街であり、工場の街である。だから労働者の街でもあるわけで、革新の強い所以である。北九州のもう一つの特徴は門司港（同港は小倉港、洞海港と一緒にあって北九州港となった）で知られた国際港であり、アジア諸国特に朝鮮・中国大陸への窓口として発達した。

ところが最近筑豊の炭鉱は壊滅的狀態となり、あとにはボタ山と鉱害と惨たる職なく希望なき老人と子供を抱えた茅屋が残された。八幡、若松の石炭地域と関連中小企業は重大な影響を受け、八幡製鉄のかつて日本最大の製鉄能力は日本経済における比重を失った。石炭と鉄の事情変化は北九州の下請関連産業の中小企業に深刻な影響を与えて、一昨年以來日本で一番多くの倒産会社と不渡手形を出

して、しかもその状態は今なお続いている。

「アメリカの経済がクシャミをすると日本の経済は肺炎を起こす」と言われるが、北九州の経済は、八幡製鉄がクシャミをすると肺炎どころかバタバタ倒れるのである。

横浜、神戸では一万トン級大型船舶が港に入り切れずに港外で待機するのに較べて、ここ門司港では一万トン級の船舶が五隻も入ったら、どの市民の顔からも笑顔が消えないくらいである。

この「経済的地盤沈下」と称せられる行詰まりと不況困難の解決は、一に福岡、大分、有明など西日本の産業都市との経済交流と、もう一つは中国やアジア諸国との交流、貿易の拡大にまったく依存している。

いま一つの問題は、北九州の名物の一つ「七色の煙」と呼ばれる公害である。重化学工業、特に大企業工場地帯であるために、このまちでの市民の生活が犠牲にされてきたことである。働く場所ではあっても「住み難いまち」であり、「文化の砂漠」という悪口さえあった。

私は公害がまちの名物でなしに、「緑と太陽のあふるる街」にしたいと提唱した。奥井

慶大教授（都市学会々長）を会長に福岡県振興

計画を作った。佐賀大学長を副会長に全国の権威を網羅した調査会は昨年末、北九州市のマスタープランを答申して下さったが、その中で北九州市の将来の都市像を

(一)市民の作るまち

(二)活気あふるる生産のまち

(三)住みたくなるまちと描かれた。

「緑と太陽のあふるる街」——この表現は、今や北九州百万市民の言葉となり、理想となってきた。

公害のない「緑と太陽のあふるる街」今やこの言葉は百万市民の念願となっているが、この言葉を使い始める時、わが愛する京都の街を心の中で思い浮べていた。京都の緑と水。山紫に水清らかな街、それは京都の場合でも滝廉太郎を生んだ竹田でも、そこには美が育つ。だから「緑と太陽のあふるる街」は「美人の育つ街」でもありたい、と考えている。

「現実と夢」というが、理想は綺麗でも、現実には必ずしも綺麗ではないし、その実現は容易でもない。個人の幸福も、夫婦の愛情も一生かけて努力すべきもの。北九州市の実情

を分析して、その指し示す発展の方向にしたがって最善を尽くすべきものと思いが、そしてまた私の「持てる総てを捧げて百万市民の幸せのために」と念じつつ、努力を続けている。しかし「道は遠く」かつ平担ではない。

今まで二年間、旧市の市議会議員一八〇余名を抱えるマンモス議会があった。やっと今年二月四日改選され、六四名とノーマルな姿になったが、与党社会党は当選者九名に止まった。

合併と市の発足から五年間、昭和四十二年まで戸畑、八幡等行財政水準の高かった旧市の水準を落さないで前進するために、当該その収入はその区で使う、という経過措置が申し合わされた。合併を可能にするための保証として、行財政の一本化はまだまだ、私の希望と理想の実現化はなかなか容易ではない。最善を尽くして止む、というが、良心に従って最善を尽し、神と百万市民の審判を待ちたいと思っている。

(校友・北九州市長)